

コロナ禍とコンサート

吉田 真人

たまにコンサートに出かける。何故か協奏曲、中でもドイツの作曲家の作品が多い。コロナ禍の昨年何度か行き、幸運にもムッター女史の演奏会を聴く事が出来た。

2月20日 サントリーホール

ベートーベン：ヴァイオリン協奏曲、ヴァイオリン：アンネリヅフィー・ムッター

新日本フィル、指揮：クリスティアン・マチエラル

微弱音はクリアーに、低音部は響き豊かに、迷いなき演奏。これがベートーベンだ、と云うが如し。オケのみの演奏部分では、オケの各パートを覗き込んだり、振り向いて視線を送ったり、又、自ら拍子をとったり、恰も指揮をしているかのようであった。

終了とともに万雷の拍手とブラボーの掛け声。これは過去聞いた演奏会で最大最高の賞賛の嵐であった。流石ヴァイオリンの女王で、思わず会場で売っていたCDを買ってしまった程である。

後半のプログラムは同じくベートーベンの『ピアノ、ヴァイオリン、チェロのための三重奏曲』。ムッター女史のヴァイオリンとチェロの掛け合いにピアノが絡んでくる感じで、指揮者と楽団は如何にも刺身の棲という感じで、お気の毒であった。

3月以降は演奏会の中止が続き、欧米の演奏家の来日も不可能になったので、この演奏会は奇跡的タイミングでの開催となった。その後の演奏会中止を予見した盛り上がり方であったのかも知れない。

7月になって一定の制限の下開催が再開し、9月下旬から更に制限も緩和された。併し、元々客の高齢化が進んでいたからなのか、客席は埋まらず、観客は何れも半分程で、熱気が戻って来ない。演奏会はやはり奏者と観客が一体で作り上げるものだと、改めて思う。

この元旦にはウィーンで恒例の『ウィーンフィル・ニューイヤー・コンサート』が行われた。NHKのEテレのライブ中継を見たが、何と無観客！ がらんとした客席に向かって音が空しく響く。例年の華やぎ全くなし。華麗なるフルツは何処に行った？

世界中が早くワクチンを打ち、あの日常が戻ってほしい。